狂言装束の構成（第1報）
― 大 名 の 装 束 ―

中　野　慎　子

は じ め に

狂言装束については、染織、意匠、文様や扮装に関する文献や研究を見聞する。しかし、被服構成の立場からは、時代衣装についてはすでに栗原弘・河村まち子氏の『時代衣装の縫い方』に見られるが、狂言装束に関しては、近年、井尻登喜子氏らの「狂言装束の制作」の中で厚板の制作過程の報告があるのみで、現在上演時に着用している装束の調査報告は寡聞にして知らない。

この度、大蔵流の狂言装束を実見する機会を得た。ここに、実見した狂言装束の仕立て上がり寸法や縫製技法などを分析し記録する。狂言装束は時代により、流儀によって出入りがある。

本研究では、上演に当たりそれぞれの役割に合わせて用意される装束組を単位として調査を行う。本稿では、大名狂言の中で演じられる大名の装束として、着付「紅白段熨斗目」・上着「素袍」について報告する。

調 査 方 法

仕立て上がり寸法：和服の名称、寸法を参考にして、メートル尺で測定し、鯨尺に換算した。
形態と名称：装束の前と後の形態を図示し、各部の名称を記した。
裁　　断：実物の布幅をもとに、和裁の裁ち方を参考にして考察した。
標　つ　け：和裁の標つけ方法に準じた。
縫 製 方 法：和裁の縫い方手順に従い、二分の一縮尺で縫製し、記録した。

大 名 装 束

I．紅白段熨斗目

熨斗目には、柄によって段熨斗目・縞熨斗目・無地熨斗目がある。段熨斗目は、大名や果報者などが用いる。段の幅は大・中・小があって、大段は大名用である。布地は、経を生糸、緯は練糸で織った小袖である。

Ⅰ－１．形態と仕立て上がり寸法

形態は、前と後を図示し、測った部位と名称を図１に示した。

図１のように、基本的には現在の和服と同じような形である。男物長着と比べると、前下がり寸法が多く、衽幅と合褄幅が４cm程度広く、褄先が鋭角であるところが異なる。

仕立て上がり寸法は表１の通りである。

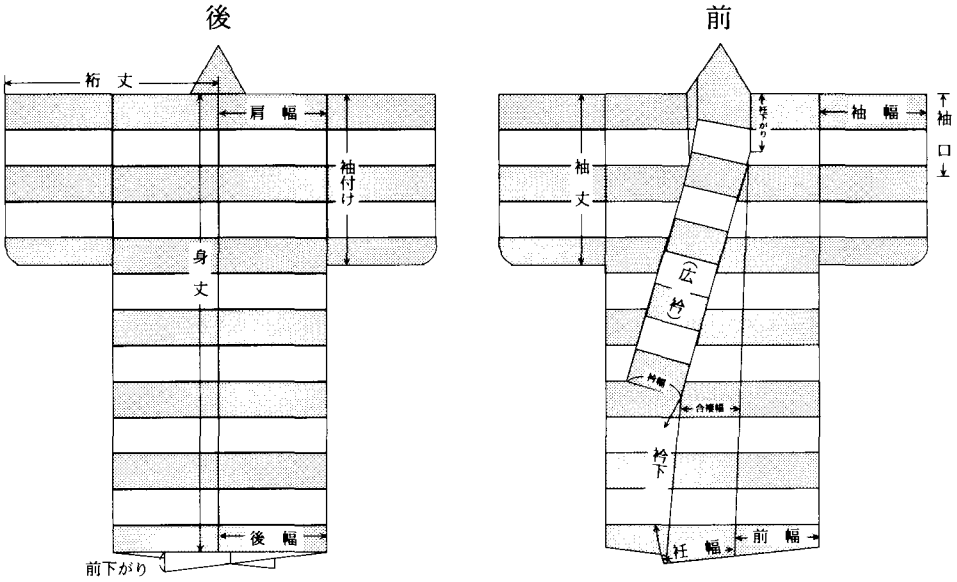


図１．形態と名称

Ⅰ－２．裁断

表布は紅白段に織られているので、柄合わせが必要である。前後とも身頃肩山と袖山に紅段が来るように織られているので、身頃を基準にして袖・衽・衿の横段が合うように裁つ。こうした柄合わせが事前に行われているので、表布の裁ち方は省く。裏布の裁ち方は図２のように袖・身頃・衽・衿を裁断する。

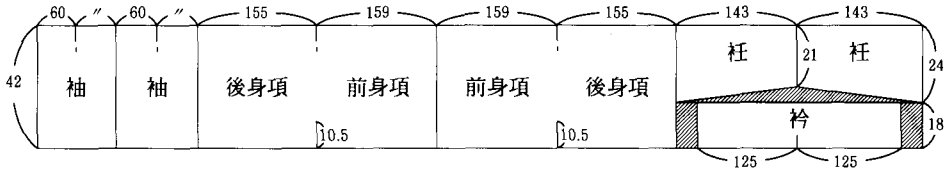


図2．裏布の裁ち方　　袖丈×4＋（後身丈＋前身丈）×2＋衽丈×2＝総丈

60×4＋（155＋159）×2＋143×2＝1154cm

表1．仕立て上がり寸法

名　称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
袖　丈	57.0	1尺5寸
袖　口	27.3	7寸2分
袖　付	57.0	1尺5寸
袖　幅	34.2	9寸
袂丸み	3.8	1寸
身　丈	152.0	4尺
裄　丈	68.4	1尺8寸
衿肩あき	9.5	2寸5分
肩　幅	34.2	9寸
後　幅	34.2	9寸
前　幅	30.3	8寸
衽下がり	19.0	5寸
衿　下	48.2	1尺2寸7分
衽　幅	20.0	5寸3分
合褄幅	19.0	5寸
衿　幅	16.0	4寸2分
前下がり	5.7	1寸5分

I－3．標つけ

標つけは図3に示した。

一般的な和裁の方法に準じる。

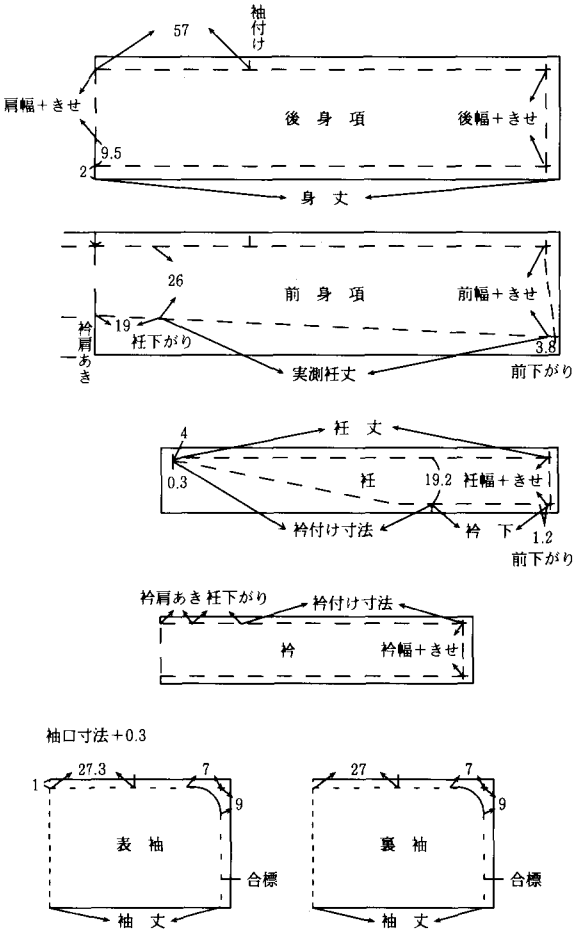


図3．標つけ

Ｉ－４．縫製方法

○袖

表袖と裏袖の袖口を縫い合わせる。裏袖側に0.2cmのきせをかけて折り、表に返し毛抜き合わせにして、しつけをかける。袖口あき止まりに四つ留めをする。四つ留めの順序は表内袖から針を出し、裏内袖、裏外袖の山をすくい、表外袖を縦に小さくすくって表内袖に戻り二重結びにする。

袖口下７cm程度は裏表別々に縫う。この部分の外袖縫い代をそれぞれ斜めに折り閉じ合わせ、それより下は袖底の合標まで四つ縫いをする。合標からは裏表別々に縫う。きせをかけて表袖側に折り、袂の丸を縫い縮め形を整え表に返し、しつけをかけておく。袖幅に0.2cmのきせを加えて、袖幅の標をする。

○身頃

後身頃は表後身頃の裾と裏後身頃の裾を中表に合わせて標どおりに縫う。0.4cmのきせをかけ、裏身頃側に折る。表に返し毛抜き合わせにして、しつけをかける。前身頃・衽の裾も後身頃と同様にする。背縫いは右後身頃を左後身頃ではさみ四つ縫いにする。裾口から上５cm程度は、表裏別々に縫う。0.2cmのきせをかけ表身頃側に折る。脇縫いは表と裏の前身頃で後身頃をはさんで四つ縫いにする。裾口から上５cm程度は表裏別々に縫う。0.2cmのきせをかけ前身頃側に折る。

○袖つけ

表の袖つけをする。表袖山と表身頃の肩山を中表に合わせ、袖つけの四つ留めをする。四つ留めの順序は表内袖から針を出し、表前身頃、表後身頃、表外袖の順に針を出し二重結びにする。表袖つけは、表袖と表身頃を合わせ袖側から縫い、縫い代に0.2cmのきせをかけて袖側に折る。次に裏の袖つけの留をする。裏袖側の四つ留めは、裏内袖、裏前身頃、裏後身頃、裏外袖の順にすくって結び、ひき続きに袖と身頃を縫い合せ、縫い代は表と同様に折る。

○衽つけ

表衽と裏衽で前身頃をはさみ、四つ縫いにする。裾口は背縫いと同様に表裏別々に縫う。0.2cmのきせをかけて縫い代は衽側に折る。

○衿つけ

表裏の衿で身頃をはさみ、四つ縫いで衿を縫いつける。0.2cmのきせをかけて縫い代は表衿側に折る。衿先は四つ留めをする。四つ留めの順序は表衿から針を出し、衿下の表裏、裏衿をすくい、表衿に戻って二重結びにする。衿先は留めより0.4cm奥を縫い合わせ、0.4cmのきせをかけて縫い代は裏衿側に折る。表裏の衿幅を標どうりに折り、毛抜き合わせにしてくける。

男物袷長着では、袖口・裾にふきを出して仕立てられているが、紅白段熨斗目では袖口・裾とも毛抜き合わせ仕立てである。

Ⅱ．素　　袍

大名や果報者の着る狂言装束を代表する衣装である。麻地の上下一対の単衣。上着は大袖で五つ紋があり、下着は長袴で腰板に紋をつける。文様は上下同じものを染め抜いてあり、デザインは大胆なものが多く用いられる。

ⅡA　上着

A－1．形態と仕立て上がり寸法

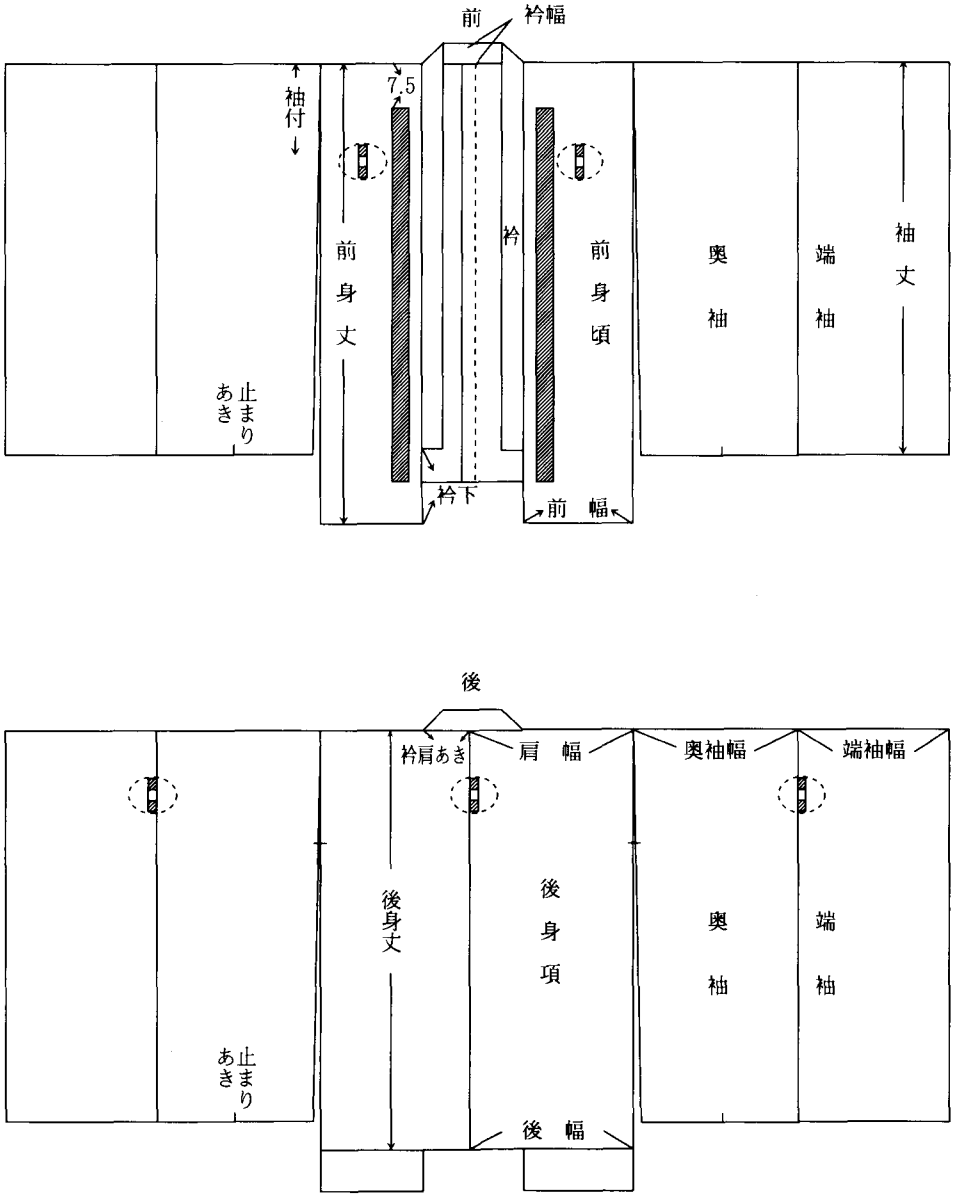
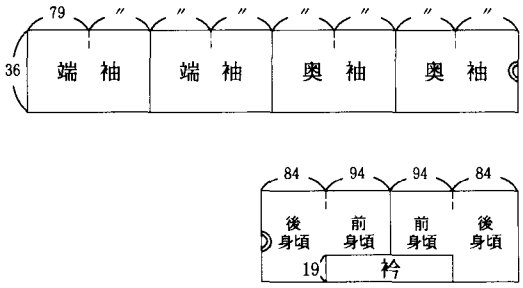


図4．形態と名称

表２．仕立て上がり寸法

名　　称	実測寸法（cm）	鯨尺換算寸法
袖　　丈	76.0	２尺
袖　　口	76.0	２尺
袖　　付	22.8	６寸
端袖幅	31.5	８寸３分
奥袖幅	32.5	８寸５分
後身丈	80.5	２尺１寸２分
前身丈	90.5	２尺３寸８分
衿肩あき	10.0	２寸６分
肩　　幅	33.0	８寸７分
後　　幅	32.6	８寸６分
前　　幅	22.0	５寸８分
衿　　幅	3.8	１寸
衿　　下	15.0	４寸

Ａ－２．裁断



袖丈×８＋（後丈＋前丈）×２＝総丈

７９×８＋（８４＋９４）×２＝９８８

図５．裁ち方

Ａ－３.標つけ

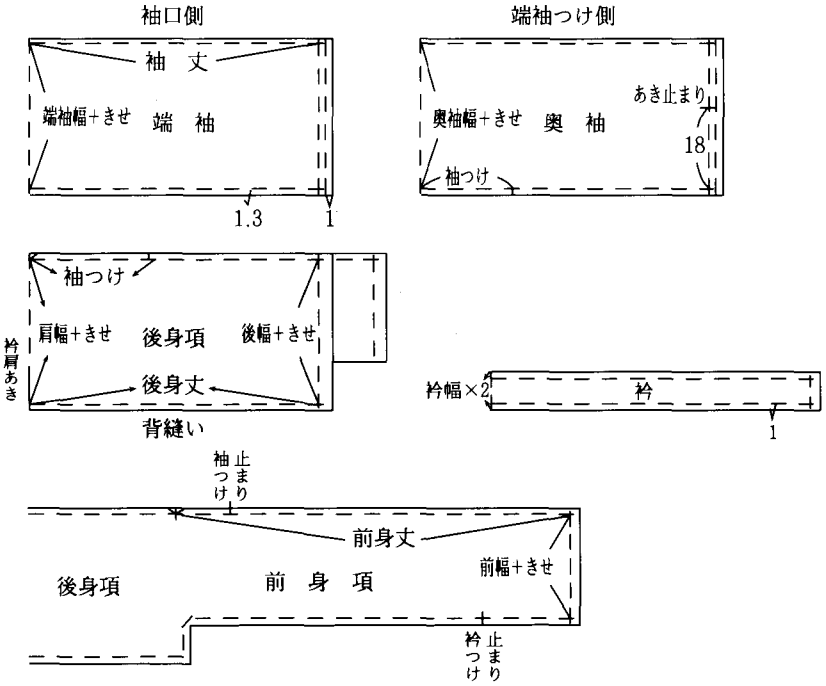


図６．標つけ

A－4．縫製方法

○袖

袖口は三つ折りにして、糊（布のり）で接着する。端袖と奥袖を中表にして縫い合わせ、きせをかけ、縫い代は端袖側に折る。袖底はあき止まりまで袋縫いをする。

○身頃

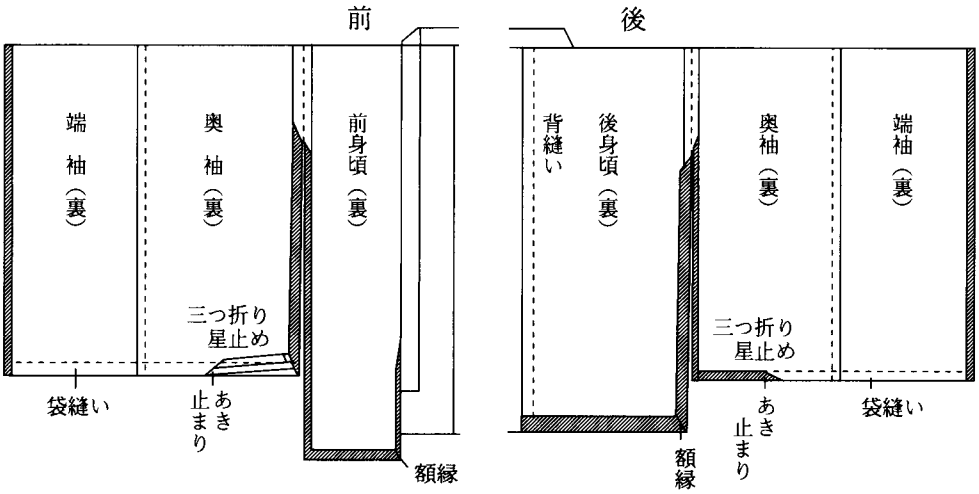
背縫いをする。

身頃に衿布をつける。縫い代はきせをかけ衿側に折り、衿幅3.8cmの出来上りに折る。衿先も出来上り丈に折ってくける。

袖をつける。身頃袖つけと奥袖の袖つけを中表に合わせて縫い、縫い代はきせをかけ袖側に折る。脇・裾・衿下、および袖下の縫い代の始末をする。縫い代は裏側に三つ折りにする。裾の角は額縁に折り糊で接着する。奥袖底は、あき止まりまで三つ折りにして星止めをしておく。（図7）

素袍の仕立ては袖口、袖下、身頃脇、裾などの縫い代の始末は三つ折りにし、糊で接着する。

前身頃には、飾り紐として長さ76cm、幅3.5cmの絹布、または鹿皮の紐をつける。



部分は三つ折りにして糊（布のり）で接着

図7．糊で接着する部位

ⅢB　下着［長袴］

B－１．形態と仕立て上がり寸法

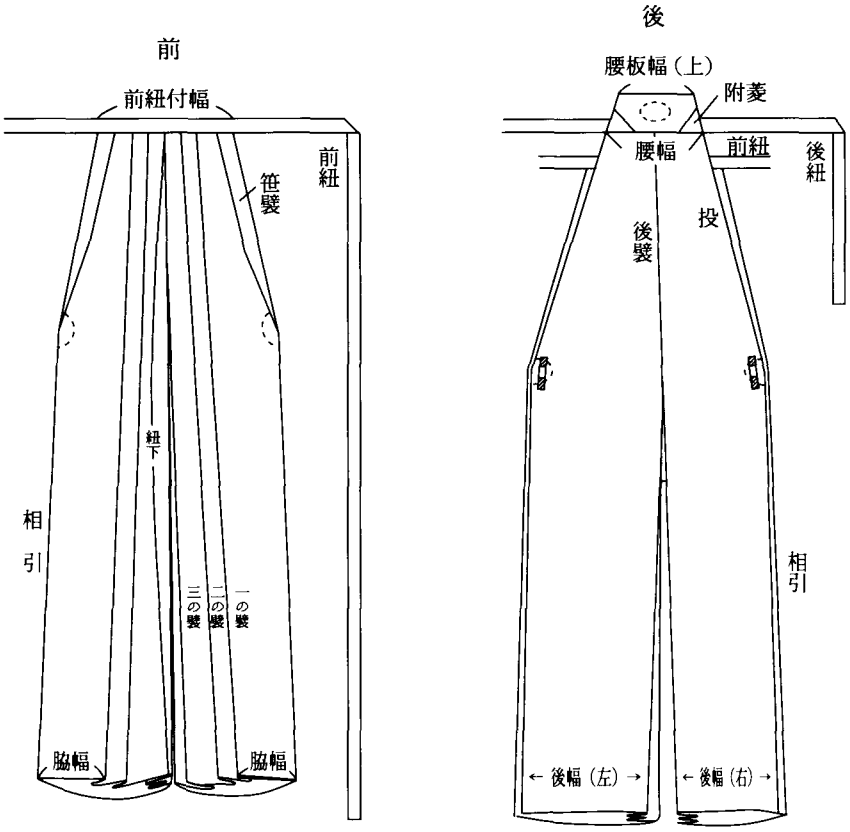
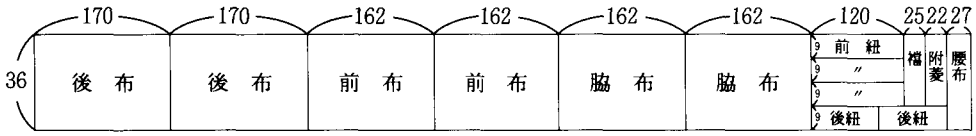


図８．形態と名称

B－２．裁断



（後丈＋前丈＋脇布丈）×２＋紐丈＋腰布＝総丈
（170＋162＋162）×２＋167＋２７＝1182cm

図９．裁ち方

表3．仕立て上がり寸法

名　称	実測寸法（cm）	鯨尺換算寸法
紐　下	154.0	4尺
相　引	107.0	2尺8寸
後　幅（右）	26.0	6寸8分
後　幅（左）	30.0	7寸6分
腰　幅	25.0	6寸6分
脇　幅	15.5	4寸
前紐付幅	31.0	8寸2分
笹襞幅	4.0	1寸
後紐幅	3.0	8分
後紐丈	70.0	1尺8寸
前紐幅	3.0	8分
前紐丈	163.4	4尺3寸
腰板幅（上）	17.5	4寸6分
腰板幅（下）	25.0	6寸6分
腰板の高さ	9.0	2寸4分
附菱の幅	9.2	2寸4分
附菱の高さ	6.0	1寸6分

B－2．裁断

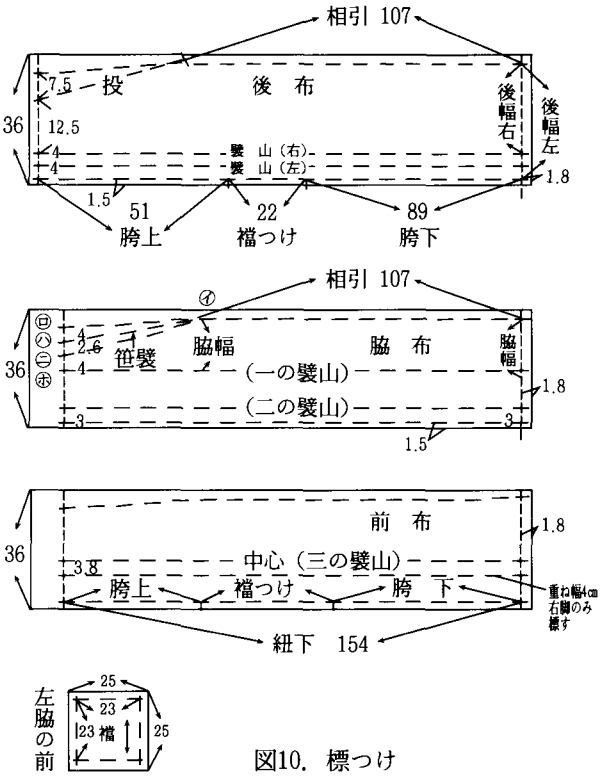


図10．標つけ

B－4．縫製方法

○後の投

後布の投を裏側へ三つ折りにし、相引止まりまで2cm間隔でくける。（図11）

○笹襞

笹襞の標つけ㋑・㋺の標を裏へ折り、さらに㋭・㋬を裏に折り、㋥を㋭に折り合わせ、㋑と結んで笹襞の形を整える。（図12－(1)）表側笹襞の折り山より0.2cm外側を二目落としでとじる。（図12－(2)）縫い代は笹襞側に倒し、紐つけより16cm下から3cm間隔で笹襞の裏側でとじておく。（図12－(3)）

○脇布と表布の接ぎ合わせ

脇布と前布を中表にして縫う。縫い代は前布側に折る。

○前後股上縫い

前の股上を中表にして縫い合わせ、縫い代は左脚側に折る。後の股上を中表にして縫い合わせる。

○襠つけ

後襠は身頃襠つけ位置に襠布を中表に合わせて縫う。前襠つけは身頃襠つけ縫い代を裏側に折る。襠布も縫い代を裏側に折り、折り山を合わせて裏側から0.2cmの縫い代で縫い合わせる。四隅に留めをしておく。（図11）

○裾の始末

後布、脇布、および前布の裾を幅１cmの三つ折りにして、三つ折りぐけをする。相引から５cmはくけ残す。

○襞取り

後襞は後の右脚の襞山を折り、左脚の襞山標に重ねる。後中心の襞は図11のように折る。裾は左襞山、右襞山に合わせて裾まで折り、しつけをかけておく。

前襞は右脚重ね幅の山を折り、しつけで押さえる。三の襞山の標を股上の縫い目に合わせる。股下も同じように縫い目を合わせて中心を定めしつけをかけておく。寄せ襞の幅を紐の下で一の襞、二の襞を４cmとし図13のように襞を取り、裾で襞幅８cmとして襞を取りしつけで押さえておく。

○相引縫い

前後の相引を中表に合わせて縫う。縫い代は前側に倒す。縫い止まりにかんぬき留めをする。

○股下縫い

前後の右脚、および左脚の股下縫い代を裏側に折り、折り山を合わせて表から0.2cmのところを縫い合わせる。

○後襞のとじ

後襞山より0.5cm内側に、裏からふところ襞を除いて腰立から30cmの間を二目落としでとじる。

○前紐つくり

紐布を接ぎ合わせる。木綿の芯を紐幅の２倍に裁ち紐布に入れる。両端を縫い、紐の中心を31cm残して針目１cmで紐をくける。

○前紐つけ

紐下標のところを脇で0.5cm上げ、縫い糸で仮とじをする。

紐の中心を表前中心に合わせ、紐をつけ裏側をくける。

○後腰立て

腰布は丈を二分の一の13.5cm、幅を30cmに表腰布と裏腰布を裁つ。腰板は図14の寸法で裁断する。

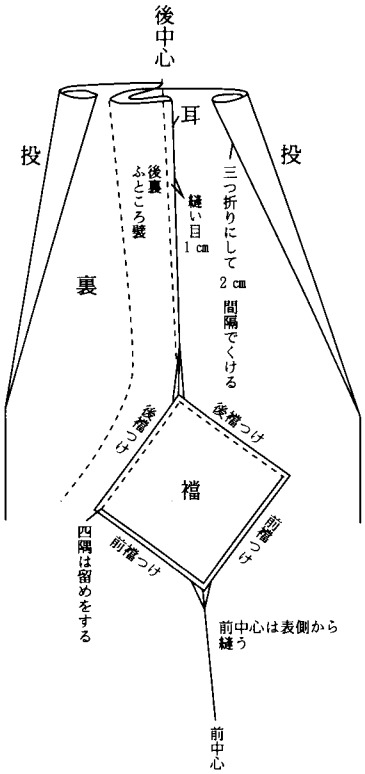


図11. 後の投・襠つけ方・襞の取り方

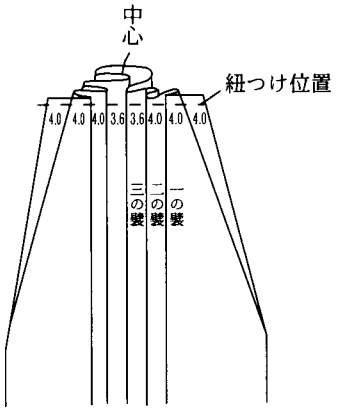
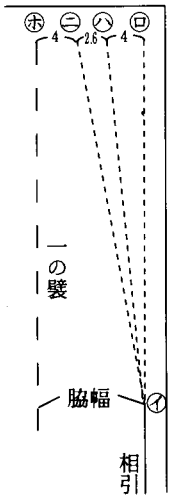


図13. 前襞のとり方



笹襞の標

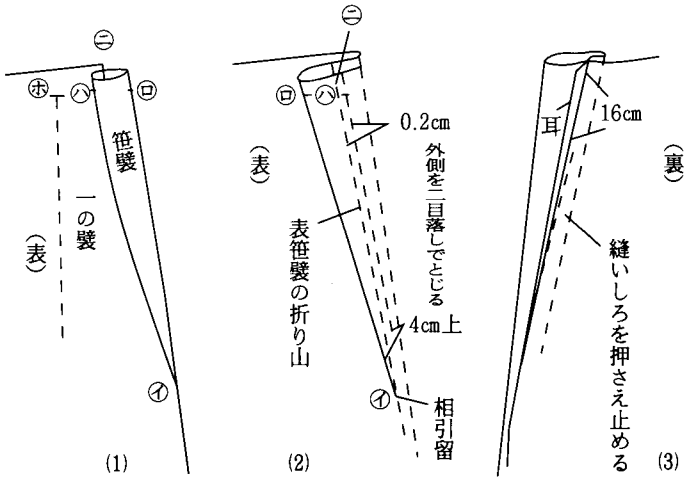


図12. 笹襞の縫い方

裏腰布と附菱を、布の周囲に糊をつけて生半紙にはり裏打ちをする。(図15)

附菱布は図16－①の大きさに裁ち、図16－①・②・③・④のように折る。腰板に表腰布を貼る。上部は腰板裏側、下部は表側に糊をつけ、中央を合わせて貼る。(図17－①) 左右は図17－②のように折って貼る。

附菱をつける。出来上がり附菱の寸法を表腰に標し、折った附菱を標に合わせておく。附菱の下側に糊を附、腰板裏側に貼る。(図18)

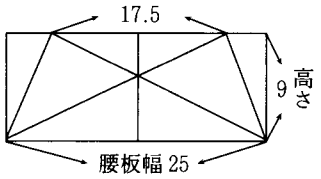


図14. 腰板の裁ち方

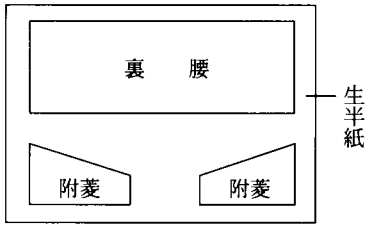


図15. 裏腰布と附菱布の裏打ち

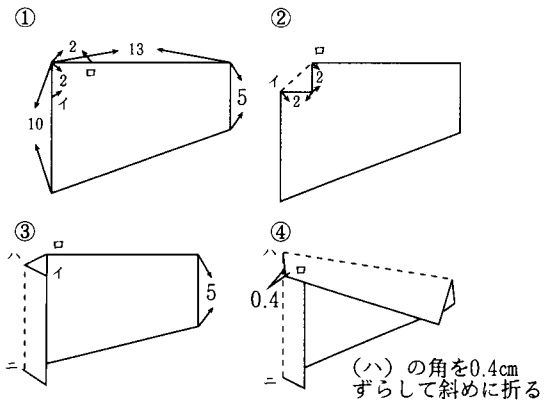


図16. 附菱の裁ち方・折り方

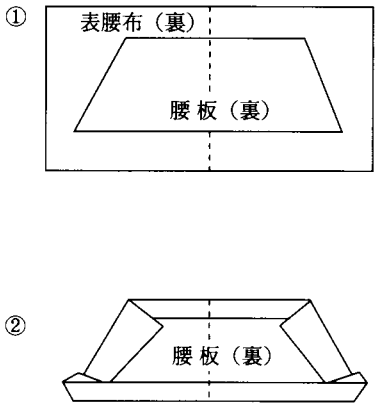


図17. 表腰の貼り方

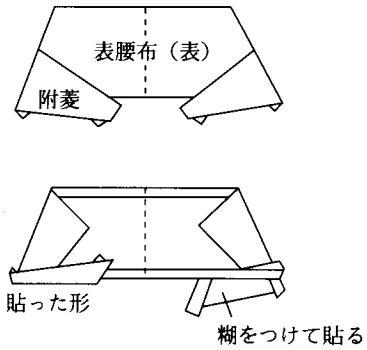


図18. 附菱のつけ方

○後紐つけ

後紐は前紐と同じように芯を入れてくける。つけ端から10cmはくけ残しておく。

後紐に切り込み２cmを入れ、腰板をはさみ手前から腰板折り山を二度すくい二重結びにして留める。(図19－①) 紐を下方に折り返し、紐で表腰を包み図19－②のように表側のみとじつけ、裏側をはなしておく。

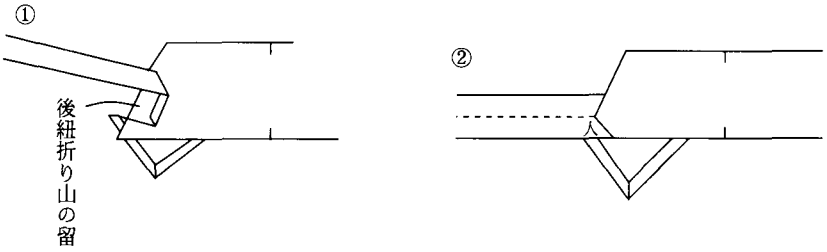
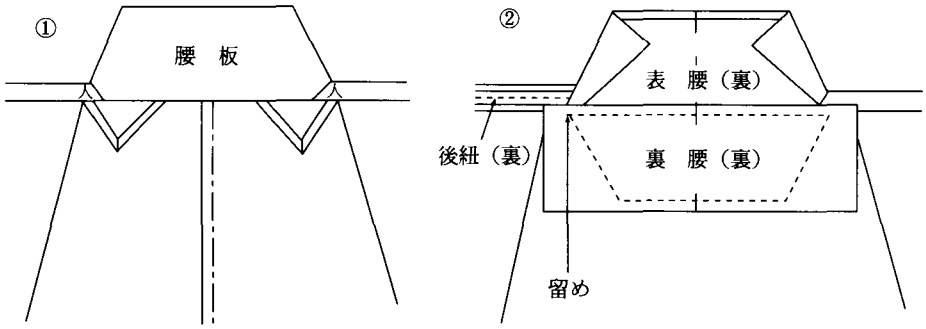


図19. 後紐のつけ方

○腰板のつけ方

後布は腰つけ標より少し上をとじておく。腰つけ標に表腰を当て、中央と両端に標をつける。腰つけ標に裏腰布の下幅の折り山を裏から当て、0.2cm内側をとじつける。腰板を腰つけ標に合わせ、附菱を下げてまち針を打つ。図20－①腰つけの留めを図20－②の順序で行う。留めの針を紐に出し、くけ残しをくける。裏腰の折り込みを紐の中に入れ、表側と同様に留めておく。縫い糸２本撚りで、裏腰の右端から図20－③に示す順序で、表には小針にしてとじる。１～４と８～11は附菱の幅の中に入れる。５の針は附菱の高さのところで腰板の裏面から斜めに針を出し、附菱の角を裏から小針にすくい腰布に戻って６、７ととじる。左８～13は右半分と同じ手順でとじる。14は最初紐山を通し、表腰に針を出し、附菱を小針で縦にすくって裏に出し、裏腰を斜めに通して針を抜く。15は14と同じように留める。後腰布も上部に糊をつけ図20－④のように腰板裏側にしっかりと糊で貼りつける。



①裏腰から針を出し、②投③附菱の折り山をすくい、④紐の表側⑤紐の裏側をすくい、⑥裏腰に戻って結ぶ

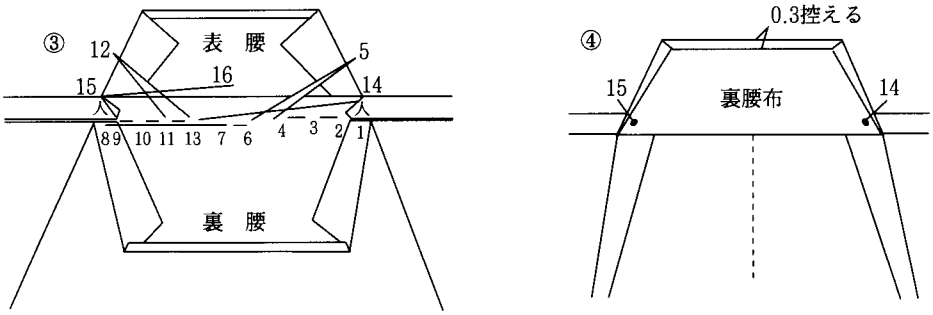


図20. 腰板のつけ方

おわりに

狂言研究は、文学・伝統芸能としての研究が主流をなしてきた。装束に関しては、意匠を中心として研究がすすめられてきた。この度、大和座主宰　安東伸元先生のご指導と大和座狂言事務所のご協力を得て狂言衣装を被服構成の立場から実測調査を行うことが出来た。ここに深謝致す次第です。今後、継続していく所存ですので、何かとご教示のほど宜しくお願いします。

参考文献

1) 栗原　弘・河村まち子：『時代衣装の縫い方―復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法―』源流社（S.59）
2) 切畑　健：『狂言の装束』京都書院（1993）
3) 古川　久・小林　責・荻原達子：『狂言辞典（事項編）』東京堂出版（S.51）
4) 権藤芳一：「狂言入門」淡交社（1996）
5) 増田正造：「狂言の装束」（「染織の美」14号）京都書院（S.56）
6) 井尻登喜子・森田雅子・山本裕香・横川公子：「狂言の装束の制作」（「武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編）」第43巻）武庫川女子大学（H. 8）
7) 土井幸代：「和裁」同文書院（S.63）